




## 学位論文審査の結果の要旨

平成 30年 11月 20日

審査委員	主査	日下 隆	
	副主査	西山 佳宏	
	副主査	門脇 則光	
申請者	鎌田 英紀		
論文題目	Long-term management of recurrent cholecystitis after initial conservative treatment: endoscopic transpapillary gallbladder stenting		
学位論文の審査結果	<input checked="" type="radio"/> 合格 <input type="radio"/> 不合格      (該当するものを○で囲むこと。)		

## 〔要旨〕

【はじめに】急性胆嚢炎治療の第一選択は早期の胆嚢摘出術であるが、併存疾患のために手術が困難な症例も存在する。手術が困難な場合、胆嚢ドレナージが必要となり、経皮経肝胆嚢ドレナージが推奨されている。しかし、抗凝固療法中の患者や胆嚢炎悪化によるDICの併存により、出血傾向にある場合や腹水がある患者、解剖学的に穿刺困難な場合は経皮ドレナージは困難である。このような患者に対して内視鏡的経乳頭的胆嚢ドレナージ/ステント留置 (ETGBD/S) が有効である。しかし、内視鏡的経乳頭的胆嚢ドレナージは経乳頭的処置であるため、ERCPに関連した偶発症のリスクもある。また、抗生剤治療や経皮的ドレナージで治癒が得られる症例も多くみられることから、ETGBD/Sは従来の治療法で改善が得られた後の再発性胆嚢炎に対する治療として適していると考えられる。これまでの胆嚢炎に対するETGBD/Sの報告は急性期における報告がほとんどで、再発性胆嚢炎に対する長期予後の成績を示した報告はほとんど見られない。本研究では再発性の胆嚢炎に対するETGBSの長期成績について後方視的に検討することを目的とした。

【対象】2006年6月から2012年5月までの間で一次治療後に再発した手術困難な胆嚢炎患者でETGBSを施行した19名を対象とした。

【評価項目】主評価項目は臨床成功率として経過観察中の胆嚢炎の再発率を評価した。副評価項目は手技の成功率と手技に伴う偶発症発生率とした。

【結果】手技の成功率は94.7% (18/19例) で偶発症は5.3% (1/19例) にERCP後膵炎を認めた。観察期間の中央値は14.95か月で、成功した18例において観察期間中の胆嚢炎の再発はみられなかった。

本研究に関する学位論文審査委員会は平成30年11月20日に行われた。

本研究は手術困難な再発性胆嚢炎に対する再発予防目的の胆嚢内ステントイングに関して有効な治療となりうることを指摘したもので、結果に対する十分な考察もなされている。本研究で得られた成果は、再発性胆嚢炎に対する新たな治療法の一つを提唱しており、臨床的意義があり、学術的価値が高い。委員会の合議により、本論文は博士（医学）の学位論文に十分値するものと判断した。

審査においては

1. 胆嚢炎で再発しやすい例とその原因
2. 胆嚢炎で治療抵抗性を示す症例
3. 無石胆嚢炎に対する治療と本法の適応
4. ステント閉塞のサイン
5. 本手技の普及度
6. ステントの留置場所
7. 胆道鏡の使用について
8. 合併症、特に胆嚢管穿孔例に対する対処法
9. 手技の難易度
10. 手技時間
11. 経皮胆嚢ドレナージとの比較
12. 膵炎以外の合併症について
13. 悪性腫瘍を伴う場合の難易度について
14. ステント長の決定の方法
15. 小児に対する手技の可能性について
16. ステント開存期間について
17. ステント留置後の補助的治療について
18. ステント留置不能例について

などについて多数の質問が行われた。申請者はいずれにも明確に応答し、医学博士の学位授与に値する十分な見識と能力を有することが認められた。

掲載誌名	Can J Gastroenterol Hepatol Volume 2018, Article ID 3983707, 7 pages		
(公表予定) 掲載年月	2018 年 4月	出版社(等)名	HinDawi

(備考) 要旨は、1, 500字以内にまとめてください。